

聴覚障害者への日本語能力試験の適用

—第二言語としての日本語学習者との比較—

佐藤 香織・渡邊 まり恵・石原 保志・大沼 直紀・吉岡 博英

キーワード：聴覚障害者、日本語能力試験、誤答分析、第二言語学習者との比較

1. はじめに

聴覚障害¹者の言語音の認知、知覚の過程においては、音声情報が量的に減衰したり、質的に歪むことが多い。補聴器を用いてもこの状態を完全に解決することは困難であり、聴覚障害者は、音声言語の受容に関して量的及び質的に恒常的に欠乏した状態におかれていると考えられる。聴覚障害に起因する問題として、言語発達の遅れが指摘されている。例えば、聴覚障害児にとって理解しにくい構文（受身文、使役文、やりもらい文、否定文など）のあること（我妻・菅原・今井, 1980, 我妻, 1981, 我妻・藤本, 1994）や、語彙の理解において聴覚障害児が健聴児と異なる面があること（四日市・斎藤・丹, 1995）などが明らかになっている。しかし、これらの研究のほとんどは、聾学校の児童、生徒などいわゆる言語獲得期にある年齢の聴覚障害児を対象に行われたものであり、聴覚障害者がある語彙・文法項目に関して「単に獲得（あるいは習得）が遅れている」のか或いは「年齢や学習面で一定の水準に達しても獲得（あるいは習得）できない」のかは不明である。

そこで本研究では、成人聴覚障害者の言語における問題点を整理するための1つの方法として、第二言語として日本語を学ぶ学習者のための試験である「日本語能力試験」を聴覚障害者に適用した。そして、聴覚障害者の誤答を第二言語学習者の誤答と比較することにより、成人聴覚障害者特有の問題点の一端を明らかにし、日本語能力試験が、聴覚障害者の言語上の問題点を検索する際に有用であるかについて検討した。

¹ 「聞こえの障害のこと。ヒヤリング・メカニズムの機能不全を示す最も一般的な用語。障害に関与する基本的な解剖学的部位（中枢対抹消）、障害の機能的性質（感度、周波数帯域、弁別、大きさやピッチの感覚、意味の理解など）、原因（遺伝、感染症、外傷など）、発生の時期（胎生期、周産期、出生後など）の区別は示さない。程度についても正常でないという以外の限定はない。主として、感度に対する障害の程度と関連させて、軽いほうを難聴、重いほうを聾とすることがあるが、両者の明確な区別は困難で、その意味では両者を包括する概念である。聴覚障害児とはそのような障害をもつ子どもで、聴覚障害者との区分は児童福祉法で18歳未満を児童としている区分が通常使われる。学校教育との関連で見ると、普通の学校生活を効果的に過ごすことが阻害される程度の障害か否かが問題となるし、障害発生の時期が言語習得以前かその後かが重要な意味を持つ。」（「心身障害辞典」（1980））

2. 聴覚障害者と第二言語学習者

聴覚障害者は、一般的に種々の種類の手話（日本手話や日本語対応手話²⁾）や指文字、そして音声言語（口話法による日本語）とを併用することが多い。ただし、1 節でも述べたように、聴覚障害者においては日本語における文法、語彙等の問題点が指摘されており、健聴者と比べて学習によって学ばなければならない側面が多い。この点は日本語を第二言語として学ぶ第二言語学習者とも共通すると考えられる³⁾。聴覚障害者と第二言語学習者との共通する文法、語彙上の誤りが見られるとしたら、第二言語教育で用いられている方法を聴覚障害教育に応用するという教育的側面や、第二言語をどのように捉えるかという言語学的問題への貢献も可能であり、聴覚障害者と第二言語学習者とを比較していくことには意義が大きいと考えられる。

3. 調査

3.1 目的

成人の聴覚障害者における、日本語運用能力（語彙、文法、読解）を、「日本語能力試験」を通じて明らかにし、第二言語学習者の結果と比較する。

3.2 方法

1) 課題

平成 12 年度日本語能力試験 2 級より「文字・語彙」（全 65 問）「文法・読解」（全 56 問）を課題とした。本来、日本語能力試験は「聴解」「文字・語彙」「文法・読解」の 3 つから構成されるが、「聴解」については聴覚障害者への実施が困難である為、本研究においては課題としなかった。

【表 1】 問題の構成⁴⁾

文字・語彙		読解・文法	
問題 I	文字	問題 I	読解
問題 II	文字	問題 II	読解
問題 III	語彙	問題 III	読解
問題 IV	語彙	問題 IV	文法
問題 V	語彙	問題 V	文法
問題 VI	語彙	問題 VI	文法

²⁾ 日本手話とは日本語とは異なった体系をもつ手話のことであり、日本語対応手話とは日本手話の手話単語を借用し、一部修正や造語を行って日本語の語順に対応して表出するものである。（八木、1996）

³⁾ 第二言語学習者は完全に母語を獲得してからの学習である場合がほとんどであるので、その点は聴覚障害者との大きな違いである。

⁴⁾ 問題の構成は、筆者の判断による。2 級の詳細な出題基準については国際交流基金・日本国際教育協会（1994）参照。

2) 手続き

各設問は全て4択の選択式課題である。制限時間は国際交流基金が定める日本語能力試験の実施要項に基づき、「文字・語彙」は35分、「文法・読解」は70分とした。制限時間内に終わられなかった者はいなかった。

3) 被験者

聴覚障害群として、T技術短期大学に在籍する聴覚障害者5名、第二言語学習群（以下、学習群）として、T大学に在籍する留学生5名で構成された。

【表2】被験者のプロフィール

聴覚障害群		
	良耳の平均聴力(dBHL)	出身学校種
A	118	聾学校高等部
B	90	一般高校
C	90	聾学校高等部
D	98	一般高校
E	92	一般高校

学習群			
	母語	学習歴	日本語能力試験受験経験
F	韓国語	4年	1級合格
G	韓国語	4年	未受験
H	韓国語／中国語	8年	未受験
I	韓国語／中国語	8年	1級合格
J	中国語	2年	未受験

3.3 結果

3.3.1 文字・語彙

図1に各問題における聴覚障害群、学習群それぞれの正答者数を示した。

問題Ⅰ、問題Ⅱは文字の理解を問う問題であった。問題Ⅰは漢字の読み方を問う問題で、聴覚障害群、学習群共に概ね正答であった。また、問題Ⅱは漢字の書き方を問う問題で、問題Ⅰと比較すると聴覚障害群に若干誤答が多く見られるが、やはり概ね高得点であった。

問題Ⅲは語彙の問題であり、文脈に合う意味の語を選択する問題と考えられる。問題Ⅲも聴覚障害群、学習群とも概ね高得点なのだが、特徴的な問題が2問ある。その1つは、聴覚障害群、学習群どちらも2名が誤答であった次に示す(5)である。

(1) 問題Ⅲ(5)

「姉は健康のため、プールに通っている。私も姉に_____、水泳を始めることにした。」

- 1 かわって 2 ならって 3 まざって 4 ならんで (正解 2)

聴覚障害群でみられた誤答は「3 まざって」「4 ならんで」が1名ずつであった。学習群では「4 ならんで」が2名であった。もう1つは、聴覚障害群では全員正答したのだが学習群では4名が誤答であった(7)である。(7)を次に示す。

(2) 問題Ⅲ(7)

「雨は_____やむでしょう。それまでお茶でも飲んでいきましょう。」

- 1 じきに 2 すでに 3 ただちに 4 ひとりでに (正解 1)

学習群の誤答は全て「3 ただちに」であった。

問題Ⅳは語彙の問題であり、語の辞書的意味を選択する問題である。概ね正答であったが、聴覚障害群において次に示す(4)に2名の誤答が見られたことが特徴的である。

(3) 問題Ⅳ(4)

「いのちの長さ。」

- 1 人生 2 人命 3 生命 4 寿命 (正解 4)

聴覚障害群でみられた誤答は「2 人命」「3 生命」が1名ずつであった。

問題Ⅴは語彙の問題であり、語の正しい使い方を選択する問題である。問題Ⅴにおいて、聴覚障害群、学習群共に誤答が3名と多かったのが次に示す(2)である。

(4) 問題Ⅴ(2)

「いきいき」

- 1 彼は最近いきいきと仕事をしている。
2 このさしみはいきいきとしている。
3 テレビから地震のいきいきとしたようすがわかる。
4 野菜はゆでるよりいきいきと食べるほうが好きだ。 (正解は 1)

聴覚障害群における誤答は全て「2 このさしみはいきいきとしている。」であった。一方、学習群における誤答は全て「3 テレビから地震のいきいきとしたようすがわかる。」であった。また、聴覚障害群では全員正答であったが、学習群では2名が誤答であったのが次

⁵ 問題には、このように通し番号を付けている。

に示す(1)である。

(5) 問題V(1)

「くれぐれも」

- 1 秋になるとくれぐれもさびしくなる。
- 2 母は手紙で家族のことをくれぐれも知らせてきた。
- 3 健康にはくれぐれも気をつけて下さい。
- 4 もう少しがんばればくれぐれも勝てたのに。 (正解は 3)

学習群でみられた誤答は、「1 秋になるとくれぐれもさびしくなる。」「2 母は手紙で家族のことをくれぐれも知らせてきた。」が1名ずつであった。逆に、学習群では1名しか誤答の者はいなかったが、聴覚障害群では3名が誤答であった問題が次に示す(4)である。

(6) 問題V(4)

「妥当」

- 1 よくわからないが妥当に返事しておいた。
- 2 その計画は妥当的だ。
- 3 中山氏の言ったことは妥当性に欠ける。
- 4 この単語に妥当する外国語が見つからない。 (正解は 3)

聴覚障害群の誤答は全て、「4 この単語に妥当する外国語が見つからない。」であった。

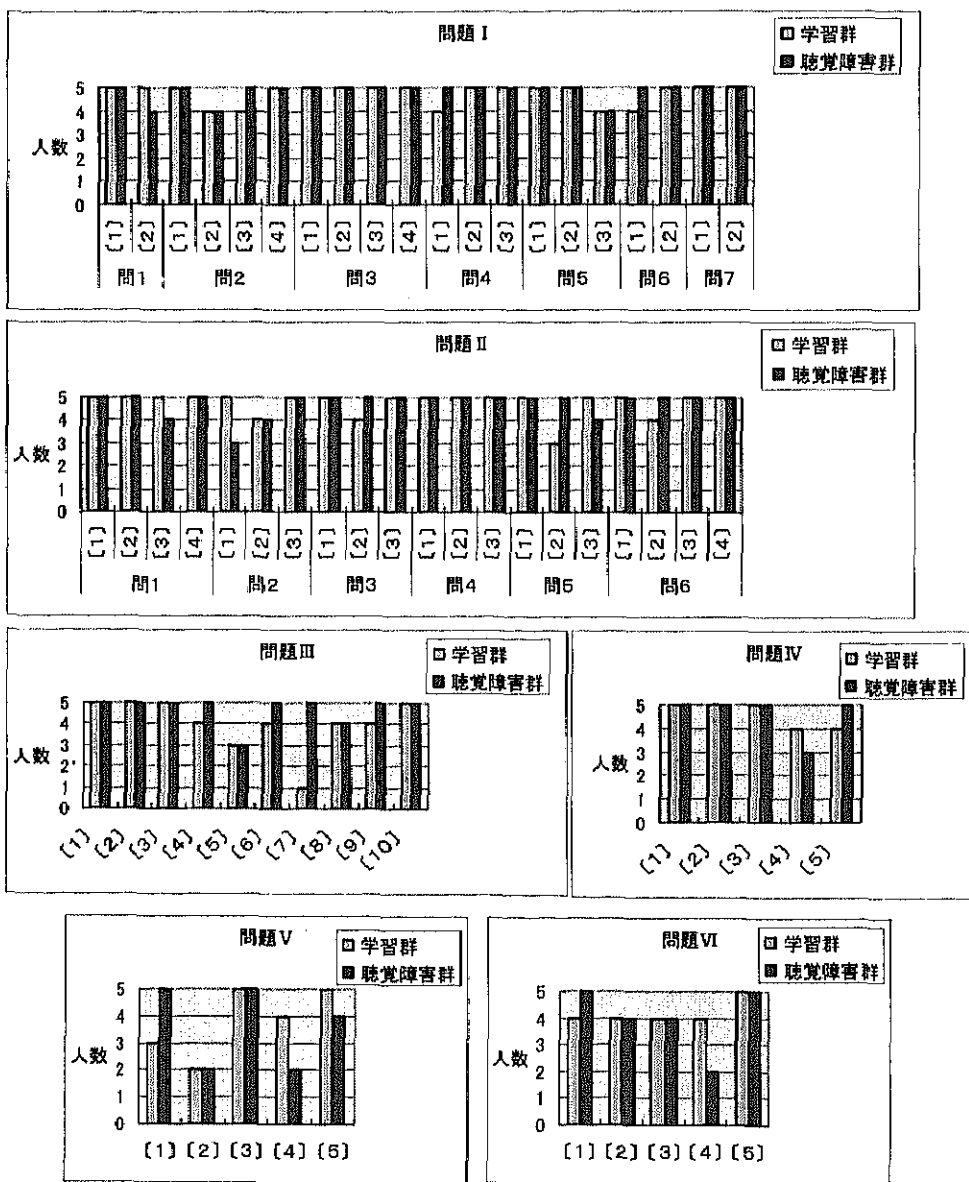
問題VIは語彙の問題であり、最も意味の近い語を選ぶ問題である。聴覚障害群、学習群共概ね正答であるが、次に示す(4)では学習群の誤答が1名であるのに対し、聴覚障害群の誤答が3名と多くなっているのが特徴的である。

(7) 問題VI(4)

「休暇はせいぜい1週間しかとれない。」

- 1 だいたい 2 せめて 3 多くても 4 少なくとも (正解は 3)

聴覚障害群でみられた誤答は全て「4 少なくとも」であった。



【図1】「文字・語彙」の各問題における両群の正答者数

3.3.2 「読解・文法」

図2に各問題における聴覚障害群、学習群それぞれの正答者数を示した。

問題Iは読解の問題である。1000字程度のエッセイを読み、その内容についての6つの問題に答えるものである。聴覚障害群、学習群とも概ね正答であったが、次に示す問4に関しては学習群が全員正答であったのに対し、聴覚障害群で2名が誤答であった。

(8) 問題Ⅰ問 4

「ボランティアさせるつもりでいました」とあるが、だれがそう思っていたのか。」

- 1 子ども自身 2 筆者 3 筆者の父 4 筆者と子ども自身 (正解は 2)

この問題文には筆者が「私」として登場しており、問 4 で問われている箇所は、「我が家では、私の父も私自身もボランティア活動を経験しており、子どもにも小さいときから大学生になったらボランティアさせるつもりでいました。」という部分である。聴覚障害群で見られた誤答は 2 名とも「3 筆者の父」であった。

問題Ⅱは読解の問題である。(1)・(3)の 3 つの下位問題に分かれており、それぞれ別の問題文を読んでその内容について答えるものである。(1)(2)は説明文、(3)は手紙文である。学習群は概ね正答であったが、聴覚障害群は(1)の問 4 で 2 名、(2)の問 2 で 2 名、(3)の問 1 で 2 名が誤答であった。それぞれの問題を次に示す。

(9) 問題Ⅱ(1) 問 4

「ロウソクの問題で、画鋲が箱の中に入っていることは被験者にどのように影響するのか。」

- 1 画鋲で箱が壁に止められることに気づきにくくなる。
- 2 画鋲の箱が台として使えることに気づきにくくなる。
- 3 画鋲がこの実験では不要なことに気づきにくくなる。
- 4 画鋲を床に刺して使えることに気づきにくくなる。 (正解は 2)

(1)の問題文では、「私たちは、画鋲が箱の中に入っていると、『箱というのは画鋲の入れ物なんだ』というふうに考えますよね。入れ物としての機能をもっていると考えると、それを台にするというアイデアはなかなか思い浮かばないんじゃないでしょうか。入れ物としてではなく、単に一つ箱がボンと置いてあると、これを台にするという考えが浮かびやすい。」と述べられている。聴覚障害群の誤答は、2 名とも「1 画鋲で箱が壁に止められることに気づきにくくなる。」であった。

(10) 問題Ⅱ(2) 問 2

「『おとり商品』の説明として正しいものはどれか。」

- 1 他のよく売れる商品と同じ値段にしてある商品
- 2 手間やムダがはぶけるから値段を安くできる商品
- 3 値段が安く感じられ、注文が集中するような商品
- 4 少し値段を高くして、注文が来ないようにする商品 (正解は 4)

(2)の問題文では、「意識的にミルクの値段を高く設定することで『おとり商品』としてい

るのである。ミルクの注文は少なくなるだろうが、そのかわり、コーヒーは割安に感じ、注文が集中することになる。」と述べられている。聴覚障害群の誤答は 2 名とも「3 値段が安く感じられ、注文が集中するような商品」であった。

(11) 問題Ⅱ(3)問 1

「この手紙を受け取る人はどんな人か。」

- 1 最近、引っ越しをした人
- 2 これから引っ越しをする人
- 3 今年もクラス会に出席した人
- 4 今年もクラス会の幹事をした人 (正解は 1)

(3)の問題文(手紙文)では、「そちらでの生活には、もう慣れましたか。さて先月の 25 日に今年のクラス会が無事に開かれました。」と述べられている。聴覚障害群の誤答は 2 名とも「4 今年もクラス会の幹事をした人」であった。

問題Ⅲは、読解の問題である。(1)-(6)まで 6 つの下位問題に分かれており、それぞれ別の問題文(240 字程度)を読んでその内容について答えるものである。ただし(5)には、グラフの読み取りも合わせて課されている。学習群は概ね正答であったが、聴覚障害群は(5)で 3 名、(6)で 2 名が誤答であった。それぞれの問題を次に示す。

(12) 問題Ⅲ(5)

「73 年(・・・)と 93 年(——)を比べると、30 歳代から 40 歳代についてどのようなことが言えるか。グラフと説明が合っているものを選びなさい。」

- 1 73 年では「未来中心」の生き方を目指す人が多いのに対し、93 年では身近な人たちと自由楽しく過ごそうとする「現在中心」の方が多くことから、今の生活を大切に考える傾向が強くなってきたことがわかる。
- 2 73 年では「現在中心」の生き方を目指す人の方が多くに対し、93 年では豊かな生活を目標にしてみんなと力を合わせていこうとする「未来中心」の方が多くことから、将来の生活を大事に考える傾向が強くなってきたことが分かる。
- 3 73 年と 93 年のどちらも、今を楽しく生きられればそれでいいという「現在中心」の生き方が、将来のために努力しようという「未来中心」の生き方より重視され、今の生活を中心に考えていることが分かる。
- 4 73 年と 93 年のどちらも、将来のために努力しようという「未来中心」の生き方が、今を楽しく生きられればそれでいいという「現在中心」の生き方より重視され、将来の生活を中心に考えていることが分かる。(正解は 1)

(5)は正しく折れ線グラフ⁶を読み取り、それに合う選択肢を選ぶ問題である。聴覚障害群の誤答は、「4」が2名で「2」が1名であった。

(13) 問題Ⅲ(6)

「『気がついたのです』とあるが、筆者はどんなことに気がついたのか。」

- 1 「若い人にどのように生きてもらいたいか」というような質問を、自分はされたくないと思っていたこと
- 2 「若い人にどう生きて欲しいか」というような生き方についての話をする年齢に、自分がなっていたこと
- 3 もう若くはない自分が若い人に人生について語っても、聞いてくれる人はいないと思っていたこと
- 4 自分の子どもを含めて若い人にどう生きて欲しいかということ、今まで望んだことがなかったこと (正解は 4)

(6)の問題文では、「自分が長いあいだ、人に『どう生きて欲しい』などと願ったりすることから遠いところにいたんだな、ということに気がついたのです。」と述べられている。聴覚障害群の誤答は、2名とも「2 『若い人にどう生きて欲しいか』というような生き方についての話をする年齢に、自分がなっていたこと」であった。

問題Ⅳは、文法の問題であり文脈に合う最も適当な表現(複合格助詞、副詞と呼応する表現、文末表現など)を選択するものである。全体的に、聴覚障害群と比べると若干学習群に誤答が目立っている。聴覚障害群に比して特に学習群に誤答が多かった問題は(3)(7)(17)であり、学習群の誤答はそれぞれ3名、2名、3名であった。問題を以下に示す。

(14) 問題Ⅳ(3)

「今まで何度酒をやめようと思った_____。」

- 1 ことだ 2 ことか 3 ものだ 4 ものか (正解は 2)

学習群の誤答は「1 ことだ」「3 ものだ」「4 ものか」が各1名ずつであった。

(15) 問題Ⅳ(7)

「この国の人口は、昨年の1月_____で、約8,530万人です。」

- 1 今 2 現在 3 時間 4 時期 (正解は 2)

学習群で見られた誤答は、「3 時間」「4 時期」が各1名ずつであった。

⁶ 紙面の都合上、問題Ⅲ(5)のグラフは割愛する。

(16) 問題Ⅳ(17)

「田中さんのプランは、その発想_____独特だ。」

- 1 をして 2 からは 3 をもって 4 からして (正解は 4)

学習群で見られた誤答は全て「2 からは」であった。一方、学習群に比して聴覚障害群に誤答が多く見られたのは(9)であり聴覚障害群 2 名に誤答が見られた。問題を以下に示す。

(17) 問題Ⅳ(9)

「どうしても解けない数学の宿題を兄に説明してもらったら、かえって_____。」

- 1 分かってきた 2 先生に聞いた 3 分からなくなった 4 先生に聞かなかった

(正解は 3)

聴覚障害群で見られた誤答は、2 名とも「1 分かってきた」であった。さらに、聴覚障害群、学習群ともに誤答が多く見られたのが(15)であり、聴覚障害群では 2 名、学習群では 3 名が誤答であった。問題を以下に示す。

(18) 問題Ⅳ(15)

「この映画は大人向けなので、子どもは_____。」

- 1 見てもおもしろい 2 見てもつまらない 3 見るところだ 4 見るところではない (正解は 2)

聴覚障害群、学習群共、見られた誤答は全て「4 見るところではない」であった。

問題Ⅴは文法の問題であり、文意に沿う文末表現を選択するものである。聴覚障害群では、(2)(3)(8)の誤答が学習群より多く見られたことが特徴的である。(2)(3)(8)の聴覚障害群の誤答はそれぞれ、3 名、2 名、2 名であった。(2)(3)(8)の問題を以下に示す。

(19) 問題Ⅴ(2)

「この問題は人口がだんだん減っていて、何か対策を立てない限り、今後も増えることは_____。」

- 1 ないだろう 2 あるだろう 3 あるかもしれない 4 ならないだろう

(正解は 1)

聴覚障害群の誤答は「4 ならないだろう」が 2 名、「3 あるかもしれない」が 1 名だった。

(20) 問題Ⅴ(3)

「山本さんは、ある日突然会社をやめてまわりを驚かせたが、あの人の性格を考える

と、理解_____。」

- 1 しなくものだ 2 しなくはない 3 できそうもない 4 できなくはない

(正解は 4)

聴覚障害群で見られた誤答は、2名とも「3 できそうもない」であった。

(21) 問題V(8)

「その問題についていろいろな意見が出ているが、それは、みんなが関心を持っているからに_____。」

- 1 かぎらない 2 ほかならない 3 ともなわない 4 かかわらない (正解は 2)

聴覚障害群で見られた誤答は、2名とも「1 かぎらない」であった。一方、学習群は概ね正答であったが、誤答が聴覚障害群より多く見られたのが(7)であった。学習群では2名が誤答であった。問題を以下に示す。

(22) 問題V(7)

「わたしは仕事でしばしば出張するので、あちこち旅行できていいとみんなに言われるが、いつも忙しくて見物する_____。」

- 1 はずではない 2 べきではない 3 ものではない 4 ところではない

(正解は 4)

学習者で見られた誤答は、「1 はずではない」「3 ものではない」が各1名ずつであった。

問題VIは文法の問題であり、文脈を理解した上で適切な表現を選択するものである。特徴的な問題は(1)と(6)である。(1)は聴覚障害群は全員正答であったが、学習群は3名が誤答であった。一方(6)は聴覚障害群、学習群共3名が誤答であった。以下に問題を示す。

(23) 問題VI(1)

「『誰かポスターをかいてくれる人を知りませんか。来月、社内オーケストラのコンサートを開くんです。』『ああ、それなら弟に_____ くださいませんか。美術学校の学生なんです。』」

- 1 かかせてやって 2 かかれてやって 3 かかせてもらって 4 かかれてもらって (正解は 1)

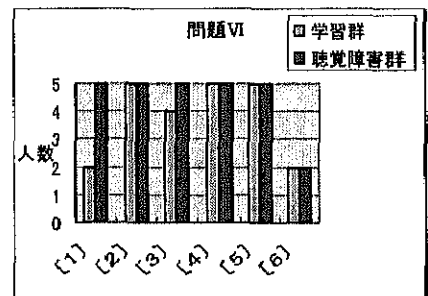
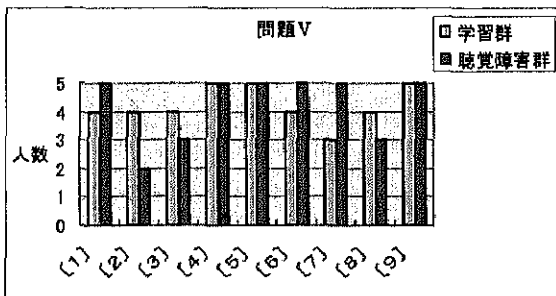
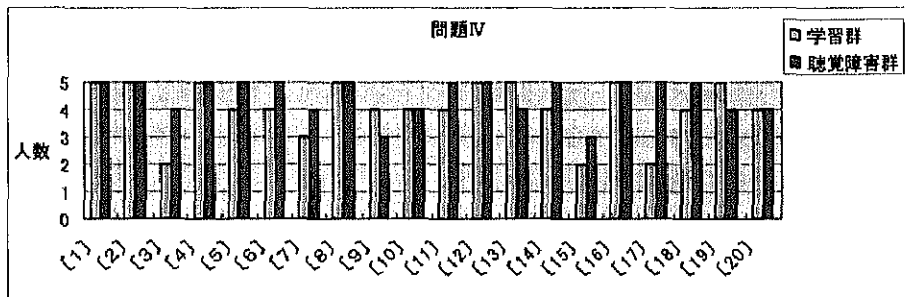
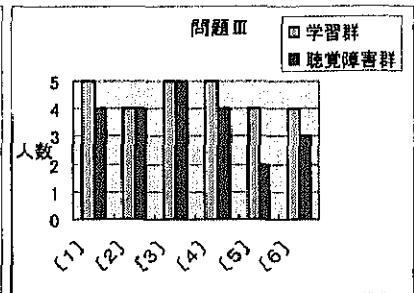
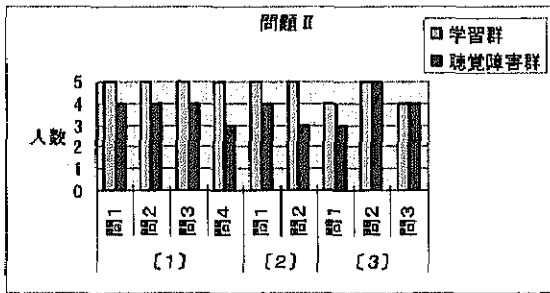
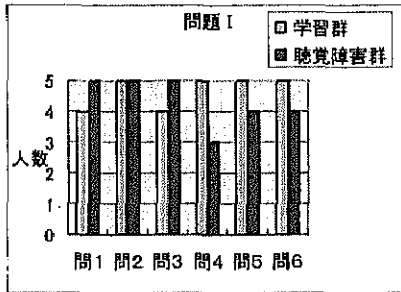
学習群で見られた誤答は、全員「3 かかせてもらって」であった。

(24) 問題VI(6)

「まんがの種類が増えている。子どものためのもの_____大人が読むための歴史や経済のまんがもよく見かける。」

1 をとわず 2 はもとより 3 もかまわず 4 にさきだって (正解は 2)

聴覚障害群、学習群とも誤答は、「1 をとわず」が2名、「3 もかまわず」が1名であった。



【図2】「読解・文法」の各問題における両群の正答者数

4. 考察

聴覚障害群の誤答に見られる最大の特徴は、否定表現に関わるものが多いということである。その1つは、否定と呼応する副詞である〈例(7)「多くてもーない」(17)「かえってーでない」〉。もう1つは「ーない」を含む文末表現である〈例(19)「ーなことはないだろう」(20)「ーできなくはない」(21)「ーにはほかならない」(22)「ーするどころではない」〉。また、この他にも否定と関連した誤答と考えられるのが、「この映画は見てもつまらない」を「この映画は見るところではない」とした(18)や、「ーはもとより」を選択すべきところから「ーを問わず」「ーもかまわず」を選択した(24)である。更に、(13)において「ーから遠いところにいた」という比喩的表現から「ーしてこなかった」という解釈が出来なかったと考えられる誤答も見られた。これらのうち(18)(24)については、学習群でも共通して誤答が多く見られた。

聴覚障害群の誤答に見られる特徴の2つ目は、読解問題において与えられた文情報から正確に事実関係を把握出来ていない点である〈(9)(10)(11)(13)〉。またグラフから事実関係を正確に把握することも苦手なようである〈(12)〉。ただし(12)は学習群においても共通して誤答が多く見られた。

一方、学習群では聴覚障害群のように否定に関する誤りが多いということとはなかったが、文脈に応じて副詞を正しく用いることが出来ないという特色が見られた。例えば「じきに」を選択すべきところで「ただちに」を選択した(2)や、「くれぐれも」の正しい意味や用法の理解が成されていない(5)が挙げられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、聴覚障害者に「日本語能力試験」を実施し、更に第二言語学習者との比較を行った。その結果、聴覚障害者では否定表現の理解と運用や、文情報から正確に事実関係を把握することに困難があるのではないかということが示唆された。このことから、日本語能力試験が、聴覚障害者の言語上の問題点を検索するのにも有用であると考えられた。今後、聴覚障害教育の現場などで実際に普及させることが可能であるかについて、被験者数を増やし検討していく必要がある。

また、聴覚障害者にみられた否定表現の理解・運用、文情報を手がかりとした事実関係把握における困難については、個別に取り上げてより詳細に検討しなければならない。特に否定に関する誤用については、本研究での結果では第二言語学習者において特に誤りが多いということとはなかったが、小林(2001)、迫田(2001)などでは第二言語学習者における否定形や否定表現の習得に関する問題が指摘されており、被験者となる第二言語学習者のレベルなども考慮しながら、更に聴覚障害者との比較を行っていききたい。また、本研究の結果においても、第二言語学習者との比較によって聴覚障害者と第二言語学習者の共通して見られる言語上の問題があることが見出されており、この点に関しても取り上げて深く検討していきたい。

【参考文献】

- 我妻敏博・菅原廣一・今井秀雄(1980)「聴覚障害児の言語能力〈Ⅲ〉—うけみ・やりもらい文の理解—」『国立特殊教育総合研究所研究紀要』7, pp.39-47
- 我妻敏博(1981)「聴覚障害児におけるうけみ文・やりもらい文の理解」『聴覚障害』36(5), pp.15-21
- 我妻敏博・藤本文子(1994)「聴覚障害児の複文理解方略に関する一考察(その1)」『聴覚言語障害』23(1), pp.1-12
- 市川保子(1993)「中級レベル学習者の誤用とその分析—複文構造習得過程を中心に—」『日本語教育』81, pp.55-66
- 国際交流基金・日本国際教育協会(1994)『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 国際交流基金・日本国際教育協会(2001)『日本語能力試験：1・2級試験問題と正解』凡人社
- 小林典子(2001)「第9章 文法の習得とカリキュラム」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝巳・小林典子著『日本語学習者の文法習得』, pp.159-176, 大修館書店
- 迫田久美子(2001)「第2章 学習者の文法処理方法」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝巳・小林典子著『日本語学習者の文法習得』, pp.25-44, 大修館書店
- 日本国際教育協会調査普及課(1986)「日本語能力試験について」『日本語教育』58, pp.39-52
- 八木治(1996)「I 解説編(9) 手話の利用」吉岡博英・四日市章・立入哉編著『聴覚障害教育情報ガイド』, pp.84-90, コレール社
- 四日市章・斎藤佐和・丹直利(1996)「項目反応分析による聴覚障害児の語彙の評価」『特殊教育学研究』33(2), pp.51-59

【辞書】

【心身障害辞典】(1980) 石部元雄, 伊藤隆二, 鈴木昌樹, 中野善達(編), 福村出版

追記

本研究の調査を進めるにあたって、筑波技術短期大学の学生の方々ならびに筑波大学の留学生の方々のご協力を得ました。謹んで感謝申し上げます。